

博士「できた！ついにできたぞ！！」

助手「おお。」

博士「私の性癖を満たせる座席だ。この座席は女子高生が座ると小刻みに揺れて尿意を刺激する、あっという間におもらし街道へ一直線というわけだ。」

助手「天才でございます！！」

博士「早速この座席を可愛いJKが多く出没する小田急線にセットして。」

そしてその座席は小田急線のとある車両にセットされていた。そんなことはつゆ知らずの3人のJKがいた。

萌香「今日はどこ行く？」

姫子「原宿？表参道？どこにしよう。」

奈美「久しぶりに竹下通りでも行く？」

2人「賛成！」

その3人は小田急線のとある駅で列車を待っていた。

「まもなく、2番線に電車が参ります。黄色い線の内側までお下がりください。」

キュイイイイイイイインキュウウウウウウンプシユウウウウウ

奈美「まあこれに乗ったら一本だね。」

萌香「乗りましょう。」

姫子「うん。」

そして列車は走り出す。

萌香「なんかさ、椅子が微妙に揺れてない？」

姫子「そうね……。なんか変な感じ。」

奈美「でもまだ原宿までは長いから座ってようよ。」

3人が我慢している様子は車両の上部に設置されたカメラを通じて博士のもとに送信される。

博士「いいねえ！」

助手「最高ですね！」

博士「これを海外のサイトに……。いや、彼女の名誉のためにもやめておこう。」

助手「そうですね。」

博士「もっと作っちゃおう！増産増産！！」

博士たちに見られていることなど知らない3人。しかしまだ列車は成城学園前駅付近を走行中であった。

奈美「どうしよう。」

姫子「我慢できないかも。でも駅のトイレは恥ずかしいから使いたくない……。」

おためしはここまで